INTERVIEW

当社の地域創生支援室は、「地域の未来を共にデザインする」をコンセプトに、地域がかかえる課題を多面的に検証し、事業の構想初期段階から運営参画まで、地域のパートナーとして、にぎわいある地域の新しい未来のストーリーをつくっています。本ニュースレターでは、室長の鎌田と大竹に、地域創生支援室の取り組みと目指す未来について話を聞きました。

地域と企業のつながりから新しい循環を生み出す、地域創生支援室の挑戦

大竹 悠介
マーケティング・サステナビリティ統括部 地域創生支援室

広告代理店、映画会社、教育系スタートアップ企業を経て、2023年に丹青社に入社。まちづくり会社や地域の教育NPOの運営に携わってきたキャリアを活かし、地域共創プロジェクトのプロデュースに携わる。組織や部門を越境しながら、横断的に企業と地域社会を繋ぐ架け橋となることを使命に活動を推進している。

鎌田 隆志
マーケティング・サステナビリティ統括部 地域創生支援室 室長

丹青社入社以降、幅広い空間づくりのプロジェクトマネジメントを手がける。2019年に地域創生支援室を立ち上げ、室長に就任。地域課題を多面的に検証し、事業の構想から運営への参画まで、地域のパートナーとして未来のストーリーづくりをサポート。各地のさまざまな課題を解決するための活動を推進している。

01 丹青社の強みを活かして生まれたチーム

鎌田　地域創生支援室の立ち上げは2019年。当社の強みであるミュージアムなどを扱う文化空間事業部（当時）から展開する形で発足しました。少数精鋭のチームではありますが、他のチームや事業部とも連携しながら、これまでの丹青社にはなかったような仕事を生み出していこうと試行錯誤を重ねています。

大竹　現在地としては、地域×丹青社という掛け合わせによって生まれるテーマの幅を広げていくことに注力しています。例えば古民家の古材を活用することや、核家族化が進んだ都市型コミュニティの再興など、当社の空間デザイン力を活かして社会課題の解決にアプローチするといった取り組みを模索しています。

鎌田　幅の広い領域を手掛ける当社だからこそ提案できると考えています。地域創生は対応範囲などを設けず、全国が対象ですので当社の本社オフィスがある品川なども視野に入れて活動しています。私たちとしてもまだまだ模索中ではありますが、具体的なプロジェクトが増えてきています。

02 4つのテーマで多角的に地域にアプローチ

大竹　地域創生支援室では「場をつくる」「まちをうごかす」「まちを魅せる」そして「ともにあゆむ」の4つを大きなテーマに掲げて事業を推進しています。

鎌田　「場をつくる」は当社の本業である空間づくりを通じて、その施設が地域に受け入れられコミュニケーションが広がっていくような取り組みを提案しています。「まちをうごかす」についても、施設運営のノウハウを活かしながら、コミュニティを施設内だけで閉じるのではなく、地域とともにスケールアップしていくことを見据えて挑戦を続けています。

「まちを魅せる」については、当社の空間演出に特化した専門チームであるCMIセンター（クロスメディアイノベーションセンター）と連携しながら、映像やAR/VRといったテクノロジーを駆使して地域の魅力発信を支援しています。こうした地域でのさまざまな共創を紹介することで、空間事業の引合いや受注にも貢献できるよう活動しています。

大竹　全国の空間づくりを手掛けているため、地域の課題に合わせてさまざまな知見や要素を組み合わせて企画、提案できることが強みだと感じています。

03 「のと古材レスキュープロジェクト」からサステナブルな循環へ

鎌田　最後のテーマである「ともにあゆむ」は地域創生の本質とも言えるテーマで、人材を活かした密着型の支援で地域の賑わいをともに生み出し、よりよい社会づくりに繋げていくことを目指して取り組みを進めています。代表的とも言える事例は、現在も進行している「のと古材レスキュープロジェクト」です。もともと別のプロジェクトで能登とは繋がりがあり、私自身も能登の街並みや風景、文化がすごく好きでした。その中で今年の元日に大きな地震があり……能登を守るために何かやりたいと室内で話すと、すぐに大竹さんからこの提案がありました。

大竹　地震があってから自分たちに何かできないか考えて、年明け最初の会議で企画書を提出しました。能登には立派な部材を使った古民家が本当にたくさんあります。木を植え育てて、伐採して家にする。3世代かけて建てた建築物があっという間に解体、廃棄されてしまうのはあまりにももったいないと思ったんです。古材の活用は当社の事業と親和性が高く、ノウハウを活かして味のある空間づくりの挑戦につながると思ったんです。

『のと復耕ラボ』：輪島市三井町を拠点にボランティア派遣、地域のニーズ調査などを行う団体。古材レスキュープロジェクトを立ち上げ、丹青社がサポートする。

鎌田　地域創生支援のメンバーと計画をブラッシュアップしつつ、現地で復旧の中間支援に取り組む方と連絡を取り、やりたいことを説明したところ、同じことを検討しているという方を紹介いただきました。偶然震災前からお付き合いのある方だったこともあり話がスムーズに進み、3月には現地に出向き計画づくりをスタートできました。2月の段階で社内の理解を得られたのも大きかったです。「ともにあゆむ」ために何よりも大切なのは、地域の一人ひとりと信頼関係を構築することです。私たちも現地に幾度となく足を運び、震災の被害に遭われた家主さんの想いに丁寧に向き合いながら、取り組みを進めています。当プロジェクトや能登の現状を知ってもらうための発信なども行っています。

古材レスキューの様子。漆の塗られた床材や太い柱など、貴重な古材や想いの詰まった古材を活用していく。

大竹　「のと古材レスキュープロジェクト」はまだスタートラインに立ったところですが、一時的な仕事ではなく、意志をもって「循環」という文化をつくるプロジェクトだと考えています。プロジェクトを通じて様々な関係人口を作ることで、人口減少時代の地域社会が抱える問題解決にも貢献できればと思います。

鎌田　そして古材だけでなく、食や産業など地域の資源を活かしながら、サステナブルな輪を広げていくことを目指して、これからも積極的にさまざまな地域と接点をつくり、地域の彩りづくり、にぎわいづくりに貢献していきます。

株式会社丹青社
広報室
〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL. 03-6455-8115　MAIL. pr-staff@tanseisha.co.jp
お問い合わせフォーム　https://www.tanseisha.co.jp/contact/pr

のと古材レスキュープロジェクトの詳細はこちら

地域創生支援室の取り組みはこちら

TOPICS 直近で下記ニュースリリースを配信しました

＜ニュースリリース＞

こちらから詳細を
ご覧いただけます

■2024.09.20　配信

丹青社、2025年日本国際博覧会のフューチャーライフエクスペリエンス期間展示に参加
～ディスプレイ業界としてパビリオンなどの空間づくりをサポートしてきた丹青社が万国博覧会に初参加～

丹青社は、2025年日本国際博覧会（以下、大阪・関西万博）の未来社会ショーケース事業・フューチャーライフ万博「フューチャーライフエクスペリエンス」の参加パートナーとなり、4月29日（火・祝）から5月5日（月・祝）までフューチャーライフヴィレッジにて未来に向けたメッセージを発信します。

大阪・関西万博のフューチャーライフエクスペリエンスでは、「未来の食」「未来の文化」「未来のヘルスケア」を中心に、日々の暮らしに近い分野の展示や発表を行い、未来の暮らしを提案します。当社はこのうち「未来の文化」のテーマにて、未来に向けた「問い」と「提案」として「日本の伝統文化における精神性」を掲げ、現在にふさわしい茶会とアートの展示空間を創出します。また、日本の「アートとしての工芸」を担うアーティストを支援するために当社が取り組んでいる「B-OWN-D」の試みを紹介し、当社ブースに訪れた世界の人々に、日本の美意識を根底とした工芸とアート、伝統と革新、人工と自然などさまざまな領域が統合された空間を体験していただきます。

■ 丹青社について

「こころを動かす空間づくりのプロフェッショナル」として、店舗などの商業空間、博物館などの文化空間、展示会などのイベント空間等、人が行き交うさまざまな社会交流空間づくりの課題解決をおこなっています。調査・企画から、デザイン・設計、制作・施工、デジタル技術を活かした空間演出や運営まで、空間づくりのプロセスを一貫してサポートしています。

社名　：　株式会社丹青社
所在地：　東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F 〒108-8220（本社）
創業　：　1946年10月
資本金：　40億2,675万657円（2024年1月31日現在）
上場　：　東京証券取引所プライム市場（証券コード：9743／業種名：サービス業）
URL　：　https://www.tanseisha.co.jp

本ニュースレターに関するお問い合わせ・取材のご依頼
株式会社丹青社 広報室　担当:石綿、寺戸
Mail: pr-staff@tanseisha.co.jp　Tel: 03-6455-8115
お問い合わせフォーム：https://www.tanseisha.co.jp/contact/pr